

東洋學報 第一〇三卷第四号 二〇二二年三月

論説

後漢における軍隊・将帥観

——『司馬法』『白虎通』および「軍礼」との関わりから——

青 木 竜 一

はじめに

帝政中国の特徴の一つとして、軍事は皇帝とその下の官僚制度に基づく統治体制・社会秩序の維持を主たる目的とし、そのために軍隊は官僚制度の一環として運用され、言い方を変えれば、軍隊そのものが官僚化していた、と言われる。⁽¹⁾ただ、その「軍隊の官僚化」は帝政確立と同時に行われたわけではなく、如何なる事情からそれが形成されたのかについては、別に検討が必要となる。

たとえば、春秋時代後期から戦国時代にかけて、君主の代わりに軍事を担う専門の職となった「将軍」は、軍中においては絶対的な存在として、君主の命令すらもはねのけるような存在であったが、前漢においてもその性格は

継承された。まさに前漢の將軍は皇帝權力の埒外にあり、官僚制度の秩序の枠から大きくはみ出た存在であったのである。⁽²⁾また、筆者の前稿では後漢の軍事司法に注目し、將軍が官僚制の中に組み込まれ、春秋・戦国時代以来の独自の特権的待遇が失われていったこと、そしてそれが「軍隊の官僚化」に関する一つの転機となったのではないかとこのことを指摘した。ただ一方で、後漢においてはなお、將軍等の軍事長官が軍中における絶対者として、皇帝の命令すらもはねのけることができたという伝統も引き続き継承され、「軍隊の官僚化」が完全に果たされたとは言えず、なお多くの検討課題を残すこととなった。

これに関して、孫武の有名な「將は軍に在りては、君命にも受けざる所有り。⁽⁴⁾」という言葉に象徴されるように、軍事行動を成功させるために、戦略・戦術上の便宜的措施として、將帥の独断を許し、君主の命令よりもその判断を尊重すべきであるという考えがある。これは、『孫子』に限らず、『呉子』『孫臏兵法』『尉繚子』など諸々の兵家に共通する考えであり、後世でもしばしば引き合いに出されるものである。ただ、漢代、こと後漢の軍中における軍事長官の絶対性の背景には、そのような通時代的に見られる兵法上の理由のみならず、そもそも礼としてそれが是とされていたという意識の存在が窺われる。

そこで本稿では、そもそも後漢王朝が軍隊を如何なる存在として位置づけていたのか、果たして軍隊やそれを率いる軍事長官を皇帝によって統御されるべき存在として見なしていたのかということに関して、礼意識という点に着目して検討する。第一節では、そのような礼意識の基本となる「不外治・不内御」の理念と、それに対する後漢の人々の認識について確認する。第二節では、その礼意識が普及する決定打となった章帝期の白虎觀會議について、

その結果をまとめた『白虎通』の記述から、後漢王朝の軍隊や将帥に関する認識を分析する。第三節では、その『白虎通』の理念の中核となった『司馬法』の思想について、「軍禮」等との関わりから見ていく。第四節では、それまでに検討してきた後漢王朝における軍隊・将帥觀の形成と「軍隊の官僚化」との関わりについて論ずる。

一 「不外治・不内御」の礼意識

後漢に関する記事には、国（朝廷）と軍の相互不干渉について説く「不外治・不内御（不中御）」の文言がよく見られる。たとえば、後漢の安帝期成立の儒学者・王符による『潜夫論』勸将篇に「夫れ國は外より治むべからず、兵は中より御すべからず。」⁽⁶⁾とあり、また『春秋公羊伝』襄公十九年の「大夫、君命を以て出ずれば、進退は大夫に在るなり。」⁽⁷⁾という伝文に対する後漢後期の儒学者・何休の注に「禮に、兵は中より御せず、とあり。」⁽⁸⁾とあるように、後漢代の儒学者にとつてそれは「禮」に則るものとされていた。⁽⁹⁾ただ、現存の儒家經典やその伝記等にはこの文言は見られず、しかもその出典が何なのかを直接的に明示する史書の記述も存在しない。

また、この文言は、儒学者のみならず、皇帝や官僚にも広く共有された一般的な理念であり、詔勅や上奏文の中でもしばしば用いられた。たとえば、桓帝期に車騎將軍として南方の諸蛮を討伐することとなった馮緄が、その任命に当たって授けられた策書に、「不内御」に関する文言が見られる。范曄『後漢書』列伝二十八・馮緄伝には次のようにある。

是に於いて、（馮）緄を拜して車騎將軍と爲し、兵十餘萬を將いて之を討たしむ。詔して緄に策して曰く「蠻夷

は夏を猾し、久しく討攝せず、各々都城を焚き、官人を蹈籍す。……今、將軍に非ずんば、誰か與に前迹を修復せん。進赴の宜、權時の策、將軍之を一もつらにせよ。出郊の事、復た内より御せず。……」と。⁽¹⁰⁾

ここでは馮緄に対して、軍の動かし方や状況に応じた方策についてはこれを専らにすることを許すということが述べられ、出征軍中における「不内御」の理念が確認されている。

さらに、この「不内御」の文言が単なる修辭上の建前では無かったことが、以下の靈帝期の破羌將軍・段熲と護匈奴中郎將・張奐の事例からも窺える。桓帝末年より続く北辺・西辺の羌族等の大反乱の鎮圧に当たり、北辺は張奐が、西辺は段熲が事に当たっていたが、両者には方針の対立があり、論争が起こった。張奐は恩信により招き降すことを主張していたが、それに対して段熲は、敵を殲滅して根元を断ち切ることが必要だとする方針を取っていた。この論争の一場面として、范曄『後漢書』列伝五十五・段熲伝に次のようにある。

時に張奐上言すらく「東羌は破れりと雖も、餘種は盡くし難し。(段)熲は性輕果にして、負敗常なり難きことを慮る。宜しく且く恩を以て降すべし。後悔すること無かるべし」と。詔書、熲に下る。熲、復た上言すらく「臣、本より東羌は衆しと雖も、而れども軟弱にして制し易きことを知る。所以に比しきりに愚慮を陳べ、永寧の筭を爲さんことを思う。而れども中郎將の張奐は虜は強くして破り難く、宜しく招降を用うべしと説く。……臣、毎に詔書を奉ずるに、軍は内より御せず、とあり。願わくば斯の言を卒とげ、一に以て臣に任せられんことを。臣、時に臨みて宜を量り、權便を失わざらん」と。……是に於いて東羌悉く平らぐぐ。⁽¹¹⁾

張奐が段熲の方針を非として招降を用いるべきことを主張して上奏したのを契機に、それに基づいて段熲に詔書が

下されて諮問を受けた。このときもやはり段頰は徹底殲滅を主張し、その結びに当たって、これまでも詔書によって「不内御」が度々確認されていたことを持ち出し、その言葉の通り、自らの軍事行動に関しては自分に一任してほしいということを願い出る。その結果、段頰の活躍により西辺の羌族の反乱は鎮圧された。

この件に関して注目したいのは、朝廷は、この論争に関してどちらを罷免することも無く、たとえば張奐の意見を採用して段頰の意見を却下するということは無かったが、その逆もなかった、ということである。すなわち、朝廷は統一見解を示してそれを両者に実行させるということはず、それぞれのやり方で事態を収めることを認めた。そして、張奐もまた段頰とは異なるやり方で北辺の諸族の平定に成功した。⁽¹²⁾ 朝廷は、段頰と張奐の両者に対して、「不内御」を尊重したのである。

この「不外治・不内御」の理念は、国と軍とを峻別し、国の主宰者である君主と、軍の主宰者である将帥が各々の領分を守るべきことを説き、相互の干渉を戒めているという点で、国と軍とを対等の存在と見なしている。さらに、それが「禮」に則るものであるとする意識は、あくまで君主の権力を絶対的上位に置き、君主の裁量により便宜的に将帥の独断を許すことがある、というような後世にもよく見られる構図とは前提が異なる。将帥の独断を許すか否かという以前に、そもそも君主は軍中のことに口出しすべきではない、言い換えれば、君主権力は軍中には及ばないとされているのであり、それを侵すことは礼に反することと見なされるのである。

この「不外治・不内御」の理念が皇帝・官僚・儒学者に広く共有されるようになった最大の要因として、後漢の章帝の建初四年（七九）に行われた經典論議、通称「白虎觀會議」が挙げられる。そこで次節では、これを踏まえ

て成立した『白虎通』の記述を分析する。

二 『白虎通』の理念とその応用

(一) 『白虎通』に見る後漢王朝の軍事理念

軍に対する後漢王朝の認識は、『白虎通』三軍篇および王者不臣篇に述べられている。⁽¹³⁾ まずは三軍篇の該当記事を見てみる。

大夫、兵を將いて出ずるに中より御せざるは、其の威を盛んにし、士卒をして意を一にして心を繋がりしめんと欲すればなり。故に但だ將軍の令を聞くのみにして、君命を聞かず、進退は大夫に在ることを明らかにするなり。春秋傳に曰く「此れ命を君に受けて齊を伐つに、則ち還るは、何ぞや。其の喪を伐たざるを大なりとすればなり。大夫、君命を以て出ずれば、進退は大夫に在るなり」と。⁽¹⁴⁾

ここではまず「不内御」の文言についての説明が行われ、なぜ軍中では君主や朝廷の干渉が忌避されるのかというと、將帥の威を盛んにし、士卒たちの心をその將帥の下において一つにするためであるということが述べられる。そして、そのため、軍中では將帥の命令のみを聞き、君主の命令は聞くべきではないのが是とされるのだというところが説かれる。

これのみを取り上げれば、「不内御」が尊重されるのは、諸々の兵家と同様の兵法上における便宜的な理由によるものであるかのように見える。しかし、ここではそれに加え、『春秋公羊伝』の内容が引かれ、儒教的側面から補強

が行われている。この『春秋公羊伝』の句に対し、何休が「禮に、兵は中より御せず、とあり。」と注したのは先述の通りである。白虎觀會議がそもそも「經義を正す⁽¹⁵⁾」ことを目的に開かれたことを考え合わせても、ここにはやはり「不内御」の理念が、単に兵法上の理由のみならず、儒教的な礼意識とも深く結びついていることが十分に読み取れる。

なお、『春秋公羊伝』の該当句は、漢代の儒学者たちにより問題視された、臣下の独断専行に関する『春秋公羊伝』中の矛盾した四つの記述のうちの一つである。結局、君主により派遣された臣下が専断してよいのは軍事のみ、より具体的に『説苑』奉使篇に載せられているこの議論の言葉を用いれば、「將帥用兵」のみに限定されるものと解釈された⁽¹⁶⁾。

そして、この「將帥用兵」がなぜ専断を認められているのかということについては、次の『白虎通』王者不臣篇に述べられている。

王者に暫く臣とせざる者、五有り、祭尸、授受の師、將帥の兵を用うるもの、三老、五更を謂う。……將帥の兵を用うるものを臣とせざるは、士衆を重んじて敵國と爲し、國は外より治むべからず、兵は内より御すべからず、其の威を成して其の令を一にせんと欲すればなり。春秋の義、兵は使と稱せざるは、臣とすべからざるを明らかにするなり⁽¹⁷⁾。

ここでは、一時的ながらも王者が臣下扱いすべきでない五つの存在の一つとして、「將帥用兵」が挙げられ、そのような待遇を付与する理由について説明されている。ここでもやはり先の「不外治・不内御」の文言が引かれ、三軍

篇の記事と同様、将帥の威を盛んにし、士卒が聞くべき命令の出所を将帥の下に一本化することを図っているといふことが述べられており、しかもそれが「春秋の義」に則るものであるとして補強されている。ただ、ここで最も注目すべきは、軍とは「敵國」、すなわち国に匹敵する対等の存在であると見なされているということである。このような考えは、先述の通り、ただ軍事的成功のために将帥の独断を尊重するという考え方とは一線を画すものである。軍が「敵國」である以上、その主宰者である将帥は、まさに国の主宰者である君主に匹敵する。故に将帥は「不臣」の存在とされるのである。⁽¹⁸⁾

以上のように、「不外治・不内御」の理念は、経義、とりわけ「春秋の義」を體現したものとされ、軍を「敵國」、それを率いる将帥を「不臣」とする礼觀念と結びつけられていたのである。それが白虎觀會議により皇帝や官僚・儒学者たちの間で一応の決着を見る形で相互に確認されたことが、この「不外治・不内御」の理念が後漢の人々の間に広まった主要因となったものと思われる。⁽¹⁹⁾これが単に理念であるに留まらず、実際の軍事運用の中でも引き合いに出されて効力を發揮していたことは、第一節で紹介した馮緄や段熲らの事例にも明らかであるが、その他にも、史書の記述からは、軍事に関わる儀制にもそれが反映されていたことが窺える。次項では、そのような儀制の中でも、特に皇帝と将帥の関係性を明確に示す相見儀制に注目する。

(二)『白虎通』の理念と相見儀制

相見儀制とは、公儀において官僚などが互いに面会するときに行う「公禮」としての礼儀作法の制度であり、そ

れを行う主体と客体の関係性を端的に表わすものでもある。⁽²⁰⁾

これに関して、靈帝の中平年間に起こった「韓遂の乱」に対する討伐軍の司令官となった車騎將軍の張溫について、『太平御覽』卷二九六・兵部二十七・法令の条に引く謝承『後漢書』には次のようにある。⁽²¹⁾

張溫、司空を以て車騎將軍を加えられ、韓遂を征す。丙辰、溫を引きよて崇德殿に見う。溫は軍禮を以て長揖して拜せず。⁽²²⁾

車騎將軍を拜命した張溫はまもなく崇德殿にて靈帝に見え、そこで「軍禮」に従つて「長揖不拜」の礼を行つた。この「長揖不拜」とは、後漢代の相見儀制における礼の一種で、相手と対等の関係にある場合に行うべき「亢礼」である。所属の官府の高位者や、皇帝の近臣に対して行う「敬」礼が、その官府や皇帝への統属を示すものであつたのに対し、これは謂わば統属関係を否定する礼であつた。⁽²³⁾ 要するに、張溫は「軍禮」に基づき、皇帝と対等の関係にあることを示す礼を行つたのである。これはあたかも、皇太子や王公でさえ、拜命の際には重ねて拝礼を行うのに対し、破格の待遇であるように見える。しかし、先の『白虎通』王者不臣篇の記述に基づけば、何ら不思議なことはない。なぜなら、一度任命を受けた以上、軍を率いて出征する將帥は「不臣」の存在と見なされたからである。

また、白虎觀會議に先行する明帝期の例として、范曄『後漢書』列伝十四・馬援伝附馬嚴伝によれば、刺史や太守は、將軍に謁見する際に「敬」礼を修めることとされていた。⁽²⁴⁾ 後漢の相見儀制における「敬」礼とは、「板（版）」と呼ばれる儀礼用の器具を手にして行う礼のことで、通常は官府の属官が所属の官府における上位の官僚に対して

行うものであり、異なる官府の官僚に対しては、たとえ相手が三公であっても、基本的に「敬」を修めることはしないものとされていた。しかし、ここでは刺史や太守などの長官が、異なる官府の長官たる將軍に対して「敬」礼を行うこととされていた。これはまさに「敵國」の主である將帥が「不臣」の存在として、皇帝と対等と見なされていたが故の制度であったと言える。

白虎觀會議は、章帝が祖父の光武帝や父の明帝の事業を継ぎ、兩代では解決できなかった経義をめぐる問題に決着をつけるために開いたものである。つまり、光武帝期や明帝期にも、儒教理念に基づいた礼制の建設には多大な意が注がれており、右の事例からも、すでに明帝期には如上の礼意識に基づいた儀制がある程度確立されていたことが窺える。白虎觀會議は「不外治・不内御」、あるいは軍を「敵國」、將帥を「不臣」とする礼意識が普及するのに大きな役割を果たしたが、そのための素地は、すでにそれ以前の時代から醸成されていたのである。では、如何なる経緯により、そのような素地が醸成されていたのか。その手掛かりとなるのが、先の張温の記事にも登場した「軍禮」の存在である。

張温は、「軍禮」に従って「長揖不拜」の礼を行った。「軍禮」とは、五礼の一つとして挙げられる場合には、吉礼や凶礼などの他の項目に対して、軍事に関する礼という程度の大まかな意味を表わすに過ぎないが、漢代に関する文献に現れる「軍禮」は、それとは異なり、軍の関係者が従うべき規範としての礼を指すことが多い。これについて大庭脩氏は、「前漢後期に、兵書の中では司馬法が何らかの理由で重視されるようになり、例えば漢軍の中ではこれを正式に採用するようなことがあって、軍礼は司馬法に従うことになったのかも知れない。」と述べている。⁽²⁷⁾ 漢

の「軍禮」は『司馬法』の理念に則っているとするこの見解は、妥当なものであると思われる。そこで次節では、この「軍禮」と『司馬法』に注目し、後漢の人々の軍事に関する礼意識との関係性について検討する。

三 後漢における礼意識と『司馬法』

(一) 後漢における『司馬法』の扱い

『司馬法』と言えば、北宋で成立した「武經七書」の一つとして知られる。そのうち後漢代にすでに存在が確認できるのは、『孫子』『呉子』『司馬法』『六韜』『尉繚子』の五書である。特に『孫子』『呉子』は、戦国時代以降、広く読まれ、主要な兵書として「孫呉兵法」「孫呉之書」などと併称された。⁽²⁸⁾ 後漢でもそれは同様であるが、その一方で、当時、『司馬法』は兵書というよりもむしろ礼書として尊重されていたという点で、他の兵書とは異なる扱いを受けていた。『漢書』卷三十・芸文志では、『司馬法』は、『礼古經』や『記』『周官(周礼)』などの儒家經典と並んで「六芸略」の「禮」類に「禮十三家」の一家として立てられており、「兵書略」に収められている『孫子』等とは異なる扱いを受けている。その名称も、芸文志では『軍禮司馬法』として「軍禮」の語を冠している。

前漢の武帝期以降、『司馬法』は皇帝や官僚たちにも広く読まれて尊ばれ、他の兵書とは異なり、詔勅や上奏文などにその意見や措置の根拠として引用される回数も圧倒的に多かった。⁽²⁹⁾ それは後漢でも同様であり、史書の記述から『司馬法』に造詣が深かったということが分かる人物が多く見られる。

たとえば、後漢の功臣家系に連なる後漢前期の耿秉や、第一節で既出の後漢後期の馮緄・段熲、そして後漢末の

曹操など、将帥として活躍した人物がいる。ただ、後漢ではキャリア上、文官と武官で昇進ルートが区別・固定されることはなく、たとえば耿秉や段熲・曹操のように将帥としての活躍が目立つ人物もいれば、馮緄のように將軍となったのは一度のみ、かつ一年未満の短期間であるという人物もいる。それに耿秉等にしても、将帥としての活躍が多いという傾向はあるが、キャリアの前半では中央の文官や地方の治民官となっており、後には太守や刺史・公卿に昇るなど、他の多くの官僚とそこまで大差ない官歴を歩んでいる。つまり、必ずしも将帥であるから『司馬法』を学んでいたというわけではなく、若くして学問を好んでいた馮緄が「父の業を習い、春秋嚴・韓詩倉氏を治め、律大杜を兼ね。」、あるいは、「少くして春秋司馬兵法を學ぶ。」とあるように、⁽³¹⁾『春秋公羊伝』の嚴氏学、『韓詩』の倉氏学、律の大杜学を学んでいたのと同様、通常の学問の一環として『司馬法』も学ばれていたのである。

故に、有名な儒学者たちも『司馬法』に造詣が深かった。たとえば、鄭玄・何休・服虔などの後漢後期の著名な儒学者たちは、儒家經典を始めとする諸書の注で、『司馬法』をしばしば援用している。また、鄭玄の弟子であり、経学に綜達していたという鄭慮も、『司馬法』に明かった。⁽³²⁾さらに、後漢中期の儒学者である許慎の『説文解字』にも、しばしば『司馬法』が引かれている。

後漢末期の儒学者である荀悦もまた、『司馬法』を重視しており、彼の著作である『申鑒』の記述にもそれが象徴的に現れている。『申鑒』は、曹操が牛耳っていた当時の朝廷において、禁中で献帝に侍講し、献帝に心を寄せていた荀悦が奉呈したものである。⁽³³⁾『申鑒』時事篇には次のようにある。

孝武皇帝、四夷の未だ賓^{したが}わず、寇賊の姦宄せるを以て、初めて武功賞官を置き、以て戦士を寵す。若し今、此

の科に依りて其の制を崇び、尙武の官を置き、司馬兵法を以て位を選び、秩は博士に比し、司馬の典を講じ、蒐狩の事を簡やすわし、軍功爵賞を掌り、小は五校を統べ、大は太尉を統べしめば、既に時務を周し、禮も亦た之に宜よろしからん。⁽³⁴⁾

ここで荀悦は、前漢の武帝が「武功賞官」を置いた前例に従い、「尚武之官」を置くことを提案する。そしてその「尚武之官」の選拔は『司馬法』の素養に基づいて行い、職掌としては、「司馬之典」すなわち『司馬法』を講じ、將兵に蒐狩の作法を習熟させ、その他に軍功による爵賞を担当させるべきだとする。ここで注目すべきは、この「尚武之官」の選拔基準が他ならぬ『司馬法』であり、さらに実際の職掌として『司馬法』の講義とそれに基づく蒐狩の教習を挙げ、そしてこのような「尚武之官」の設置は、時務を解決するためのものであるに留まらず、「禮」にもかなうものであると荀悦が述べている、という点である。それに加え、『司馬法』のことを「司馬之典」とも呼んでいることから窺えるように、荀悦にとって『司馬法』とは、軍事に関する実務に有用だけでなく、「禮」の実践にも必要な礼典であつたのである。⁽³⁵⁾

以上のように、後漢において『司馬法』は、兵書としてのみならず、班固の『漢書』芸文志の認識の通り、儒家の礼典として、儒家經典と同等かそれに準ずるものと見なされていた。実際に『司馬法』を見ると、古の帝王の政治を理想とし、仁・義などの徳目や各種の儀礼を重んじるなど、単に戦略や戦術などの兵法のみを説いた書物ではないのは明らかである。故に、班固は「下りて湯・武の命を受くるに及び、師を以て亂に克ちて百姓を濟うや、之を動かすに仁義を以てし、之を行うに禮讓を以てす。司馬法は是れ其の遺事なり。」と、殷の湯王や周の武王が仁義

や礼讓に基づいて師を興して人々を救ったその精神を、『司馬法』は記しているのだと説き、それに先立つ司馬遷に至っては「余、司馬兵法を讀むに、閔廓にして深遠、三代の征伐と雖も、未だ其の義を竟む能わず。」と、三代の諸王でさえも、『司馬法』の説くような義を究めることはできていなかったと、その深遠さを誉め称えたのであろう。⁽³⁶⁾

(二)「軍禮」と『司馬法』

次に、「軍禮」と『司馬法』の関わりについて具体的に見ていく。

前漢前期の例ではあるが、相見儀制とも関連して、「軍禮」と『司馬法』の関わりを示す最も端的な例として、次の周亜夫の記事がある。前漢の文帝が將軍の周亜夫の軍を勞おうとその駐屯地を自ら訪れた際の出来事について、『史記』卷五十七・絳侯周勃世家・文帝後六年の条に次のようにある。

天子の先驅至るも、入るを得ず。先驅曰く「天子、且に至らんとす」と。軍門の都尉曰く「將軍の令に曰く、軍中にては將軍の令を聞き、天子の詔を聞かず、と」。居ること何くも無くして上至るも、又た入るを得ず。是に於いて、上、乃ち使をして節を持たしめて將軍に詔すらく「吾、入りて軍を勞わんと欲す」と。(周) 亜夫、乃ち言を傳えて壁門を開かしむ。壁門の士吏、從屬の車騎に謂いて曰く「將軍約すらく、軍中は驅馳するを得ず、と。」是に於いて、天子、乃ち轡を按じて徐行す。營に至るや、將軍の亞夫、兵を持ちて揖して曰く「介冑の士は拜せず。請うらくは軍禮を以て見えん」と。……禮成りて去り、既に軍門を出ず。群臣は皆な驚く。文帝曰く「嗟乎、此れ眞の將軍なり。……」と。⁽³⁷⁾

文帝の先駆が周亜夫の軍営内に入ろうとすると、その門前で留められ、天子がお見えになるからここを通すよう要求するも、軍中では將軍の軍令のみを聞き、天子の詔は聞かないことになっているという周亜夫の軍令に基づき拒まれた。文帝自身もまたすぐには軍営内に入れてもらえず、さらに、軍中では駆馳してはならないという周亜夫の軍令に従わされた。やがて文帝が周亜夫のもとに通されると、周亜夫は「軍禮」に基づき、拝礼を行わずに揖礼を以て文帝に接した。一連のことを終えた後、驚く群臣たちに対し、文帝は、これぞ真の將軍であると賛嘆したという。

周亜夫が述べた「介冑の士は拜せず」(武装した者は拝礼を行わない)という「軍禮」について、『史記集解』や『漢書』顔師古注では、「禮に、介者は拜せず、とあり。」⁽³⁸⁾という後漢の応劭の言葉を引く。そして、この「介者不拜」の句は、『司馬法』天子之義篇の記述にも一致する。⁽³⁹⁾そして、第二節で紹介した通り、張温が靈帝に対して「軍禮」に基づいて「長揖不拜」の礼を行ったのも、この『司馬法』の「介者不拜」の考えがその背景にあったことが窺われる。

また、周亜夫の記事の中で「軍中には將軍の令を聞き、天子の詔を聞かず」とあるのは、まさに第二節で引いた『白虎通』三軍篇の「但だ將軍の令を聞くのみにして、君命を聞かず」という理念とも合致するものであり、『白虎通』にも現れている軍事に関する礼意識が、ここにも同様に見られる。ただ、このような周亜夫の態度に対して群臣が驚き、文帝がこれぞ真の將軍であると取り立てて賞賛したことからも分かるように、これは当時の將軍一般の態度とは異なるものであり、武帝期以降に『司馬法』が流行するのとは時代状況が異なるものである。その一方

で、文帝がこれを称えたように、『司馬法』が広く受け入れられるようになる素地は、すでにこの当時からあったというとも言えよう。

なお、『司馬法』は司馬穰苴の作、あるいは司馬穰苴の兵法が取り入れられて強く影響している書とされるが、その司馬穰苴と周亜夫が礼の実践者として並んで例に挙げられる場合があった。たとえば、范曄『後漢書』列伝十・祭遵伝附祭彤伝さいしゅうの論に次のようにある。

祭彤、武節は剛方にして、動用は安重。條侯・穰苴の倫と雖も、過ぐる能わざるなり。⁽⁴⁰⁾

祭彤は、剛毅で方正な武節を備えていたのみならず、軍隊の運用は物静かで重々しいものであり、その様は條侯（周亜夫）や司馬穰苴でさえも及ぶところではない、と評価されている。祭彤は後漢初期に北方に名を轟かせた名将であるが、それだけでなく、本伝によれば「至孝」と称されるなど、礼をも備えた人物として描かれる。ここで孫武や呉起、韓信や呉漢などではなく、司馬穰苴と周亜夫が喩えに出されているのは、まさに祭彤を含むこの三者が、ただ優れた将帥であるに留まらず、礼の実践者でもあるとの共通点によるものであろう。『後漢書』の注釈者・李賢もまたそのように考えたのか、該当箇所（41）の周亜夫に関する注として、先の周亜夫の話の中でも特に、「軍禮」に則って拝礼ではなく揖礼を行ったという箇所をピックアップしている。

このように漢代の軍事に関する礼意識には、『司馬法』が密接に関係していたのであるが、それは「軍禮」のみならず、先述の「不外治・不内御」の理念も同様であったと思われる。次項では、「不外治・不内御」の理念と『司馬法』の関係について見ていくこととする。

(三)「不外治・不内御」の理念と『司馬法』

先述の通り、「不外治・不内御」の理念は、国と軍とを峻別し、国の主宰者である君主と、軍の主宰者である将帥が各々の領分を守るべきことを説き、互いに干渉することを戒めるものであった。そしてこれと同様の思想が『司馬法』にも見え、それをコンパクトに示すものとして天子之義篇の次の記事がある。

古者、國容は軍に入らず、軍容は國に入らず。軍容國に入れば則ち民徳は廢れ、國容軍に入れば則ち民徳は弱る。故に國に在りては言は文にして語は溫、朝に在りては恭にして以て遜。己を修めて以て人に待し、召かれざれば至らず、問われざれば言わず、進み難く退き易し。軍に在りては抗にして立、行に在りては遂にして果。介者は拜せず、兵車には式せず、城上は趨らず、危事には齒ひらかず。⁽⁴²⁾

これによれば、国政の原理である「國容」と、軍事の原理である「軍容」は、相互に侵犯するべきでなく、「國容」が「軍容」を侵した場合にも、「軍容」が「國容」を侵した場合にも、いずれも民徳が損なわれるのだという。そして後段には、「國容」と「軍容」のあるべき姿が描かれ、「軍容」の内容として先の「介者不拜」にも言及されている。

『司馬法』では、「國容」と「軍容」の両者は等価値のものと見なされ、相互の侵犯の忌避、両者の併存と場に応じた使い分け、さらにそれによる相互扶助が説かれている。そして、この「國容は軍に入らず、軍容は國に入らず」という句は、『司馬法』の中で繰り返し登場し、しかも前漢の時点ですでに、『司馬法』の思想的特質を端的に示す

代表的な句として人々に認識されていた。なお、このような「國容」と「軍容」の考え方は、他の兵書や、先秦の儒家・法家などの他家の書とは異なる、『司馬法』の思想の最大の特徴であることが先学により指摘されている。⁽⁴³⁾

つまり、後漢における軍事に関する礼意識として広く共有されていた「不外治・不内御」の理念は、『司馬法』独自のものとされる思想と、極めて高い共通性を有していたのである。そのことは、次に見るように、すでに唐代の経学においても認識されていたようである。先にも述べた通り、『春秋公羊伝』の「大夫、君命を以て出ずれば、進退は大夫に在るなり。」の句に対する何休注には「禮に、兵は中より御せず、とあり。」とあったが、その箇所に関連している徐彦疏には次のようにある。

司馬法に云わく「闔外の事は、將軍、之を裁く」と。故に「禮」と云う。⁽⁴⁴⁾

ここでは、『司馬法』の佚文が引かれ、『司馬法』にかくあるが故に、何休は「兵は中より御せず」という理念を「禮」として示しているのだ、ということが説明されている。現に、この『司馬法』の佚文は、闔外の出征軍中のことは將軍がすべて裁くべきであるとする点で、「不内御」の理念と通じ、しかも闔の「外・内」でそれぞれの領分を区別しているという点で、「不外治・不内御」の表現の仕方とも一致する。さらに言えば、この徐彦疏は、何休の述べる「禮」の由来を『司馬法』に求めており、「不外治・不内御」の典拠自体が『司馬法』であることを示唆している。⁽⁴⁵⁾

実際に漢代においても、『司馬法』の思想と「不外治・不内御」の理念が、密接に関わるものとして一緒に引き合いに出されることがあった。たとえば、『史記』卷一〇二・馮唐伝には、前漢の文帝の問いに対する馮唐の次のよう

な言葉が記されている。

臣、聞くならく、上古の王者の將を遣わすや、跪きて推轂して曰く「闔より以内は、寡人、之を制せん。闔より以外は、將軍、之を制せよ。軍功爵賞は皆な外に決し、歸りて之を奏せよ」と。此れは虚言に非ざるなり。臣の大父言わく、李牧の趙將と爲りて邊に居るや、軍市の租は皆な自ら用て士に饗し、賞賜は外に決し、中より御せざるなり、と。⁽⁴⁶⁾

ここでは、馮唐が聞いた話として、古の君主が將帥を派遣する際の礼では、君主が跪いて推轂の礼を行い、「闔以内」すなわち国政に関しては君主が、「闔以外」すなわち出征軍中のことは將軍がすべて取り仕切ることが確認された、という逸話が述べられる。

この逸話の具体的な典拠について明示する現存の文献は無い。⁽⁴⁷⁾ただ、このうちの「闔以外者、將軍制之。」という部分は、まさに「闔外之事、將軍裁之。」という先の『司馬法』の佚文とほぼ一致している。それに、「闔」という表現を用い、その内外で君主と將軍の領分を明確にするという叙述の仕方は、漢代以前の古典中では『司馬法』にしか見られないということからも、この逸話は『司馬法』に基づくものであると見て良いものと思われる。現に、『司馬法』の各章句は「古者」「古之教民」などと、「古」を冠して始まることが多く、馮唐の述べた逸話が「上古王者之遣將」で始まるのも、この体裁に合致する。

そして、続いて語られる、戦国末期の趙人であった馮唐の祖父の体験談によれば、趙將の李牧は、賞賜を「外」なる軍中にて決し、まさに「中より御せず」であったという。このように漢代の人物もまた、『司馬法』の思想と

「不外治・不内御」の理念とを、同一の内容を示すものとして認識していたのである。

以上、三項にわたって漢代の人々の軍事に関する礼意識と『司馬法』との関係について検討してきた。その結果、漢代の礼制における「軍禮」とは、基本的に『司馬法』に則ったものであり、後漢の人々に広く共有されていた「不外治・不内御」の理念も、『司馬法』を出典とする、あるいは『司馬法』の思想と同一の内容を表わすものとして認識されていたことが明らかとなった。つまり、後漢・章帝期の白虎觀會議の結果、「不外治・不内御」の理念が「春秋の義」に沿うものとして広く共有されるようになった背景には、前漢の武帝期以降の『司馬法』の普及と、その理念を『春秋公羊伝』の「春秋の義」と結びつける営為とがあったのである。

四 後漢の軍隊・将帥觀と「軍隊の官僚化」

後漢における軍隊・将帥觀について、以上までに見てきたことを踏まえて時系列に沿ってまとめ直すと、次のようになる。

前漢の武帝期頃、「軍禮」は『司馬法』に基づくものとされるようになり、『司馬法』は詔勅にもしばしば引用されるようになった。その採用理由や経緯については、詳細に明らかにすることは難しい。ただ、これにより、それまでは周亜夫や馮唐に代表されるような、一握りの者にしか重視されなかった『司馬法』が、それ以降は軍の関係者以外も含めて広く読まれるようになり、上奏文などにも意見の根拠として『司馬法』が引かれるようになった。そして、『司馬法』の「国容」「軍容」相互不干渉の考えや「不外治・不内御」の理念も人口に膾炙するようになり、

軍隊に関する一般的な認識として広まっていた。

ただ、劉歆『七略』では、『漢書』芸文志とは異なり、『司馬法』は六芸略ではなく兵書略に収められていた⁽⁴⁸⁾というところからも窺えるように、『司馬法』の礼觀念は広く受容されたものの、『司馬法』自体はまだ前漢末には必ずしも儒家の礼典と認識されていたわけではなかった。それが遅くとも後漢の章帝期には、『白虎通』にも見られるように、その思想は『春秋公羊伝』の「春秋の義」と結びつけられ、軍は「敵國」、それを率いる将帥は「不臣」である⁽⁴⁹⁾と見なされるようになった。ただ、そのような紐づけは白虎観会議以前にすでに行われていた。

そもそも将帥を「不臣」であるとする考えは、直接的には『孝經緯鉤命決』に由来する。これは所謂讖緯書「八十一篇」の中の「七経緯三十六篇」の一篇であるとされる。「七経緯三十六篇」は、前漢末の王莽の台頭もあって古文学が隆盛し、そしてやがて王莽の篡奪が起こったという時勢を背景に、春秋公羊学者を中心とする今文学者たちが、今文学の主導権の回復を図るために造作したものとされる。そのため、そこには今文学、特に公羊学の影響が色濃く見られ、後漢後期に至っては、讖緯説と公羊学説が同質のものと認識されていたという節も見られる。また、その内容は王莽の新王朝に反対して漢王朝の擁護を図るものでもあり、まさに光武帝を始めとする漢王朝の再興の動きに沿うものであった。光武帝もそれを利用して讖緯を重んじ、天下統一後、讖緯書「八十一篇」は校訂を経た上で、中元元年（五六）に天下に宣布された。それ以降、その「八十一篇」が讖緯書の定本とされ、これ以外に新たに讖緯書を造作することは、死罪に相当する大罪とされた。⁽⁵⁰⁾

その一方で、『白虎通』に見える先述の「春秋の義」とは、具体的には『春秋公羊伝』の理念を指していた。そし

てそこに「禮に、兵は中より御せず、とあり。」と注して『司馬法』との関連付けを行った何休もまた、後漢後期の代表的な公羊学者であり、かつ緯書説の信奉者であり、さらには『司馬法』の影響を強く受けていた人物でもあった。⁽⁵¹⁾つまり、将帥を「不臣」の存在と見なす『孝経緯鉤命決』の理念が「春秋の義」と結びつけられたのはもとより、それが『司馬法』とも紐づけられたのは、両漢交替期の公羊学者が漢の擁護とそれによる今文学の復権を図るという立場から、類似の理念を有し、かつ漢の「軍禮」として尊重されていた『司馬法』に注目したが故のものであった可能性が高い。

いずれにせよ、明帝期にはすでに軍を「敵國」、将帥を「不臣」と見なす考えは儀制にも反映されており、「不外治・不内御」の理念は章帝期の白虎觀會議を通じて皇帝・官僚・儒学者たちの間で改めて「春秋の義」にかなうものとして再確認され、それに前後して『司馬法』は儒家經典と同等かそれに準ずる礼典としてさらに尊重されるようになった。⁽⁵²⁾そして、前掲の馮緄や段熲・張温などの例にも見られるように、そのような軍隊觀・将帥觀は、後漢後期の桓帝・靈帝期に至っても、一般的な認識とされており、制度や実際の軍事運用にも反映されていたのである。さて、このような軍隊や将帥に関する理念や実態は、軍隊を皇帝の統治手段として、その統御下に置くこととする「軍隊の官僚化」の傾向とは矛盾するようにも見えるが、実際には必ずしもそうではなかった。

そもそも後漢王朝が儒教理念に基づく国家体制を重視したのは、儒教理念に基づいて皇帝（天子）の權威付けを行い、その支配体制をより強固にするためであった。⁽⁵³⁾実際に、後漢初期の官僚制度の整備は、皇帝支配体制を強化するために前漢の体制を改変したものであった。⁽⁵⁴⁾軍隊に関しても、後漢では將軍が官僚制の内部に組み込まれ、そ

その他の軍事長官職との差異がほとんど無くなったというだけでなく、方面軍司令官の権限も間接的に制限されることとなった。すなわち、前漢の方面軍司令官（大将）は、その直属の部隊（部曲）のみならず、指揮下に置く他の軍事長官やその部曲も含む全軍に対して専断権を有していたが、明帝期以降の後漢の方面軍司令官（督帥）は、指揮下の軍事長官に対して処罰権等を行行使することができなくなり、各軍事長官の部曲に関しては、各軍事長官自身に専断権が委ねられることになった。このようにして、方面軍司令官の権力は前漢に比べて大きく削減されたのである。⁽⁵⁵⁾

一方で、方面軍司令官の権力削減は、その指揮下の軍事長官による専断権の獲得と、それによる個々の部曲の高い独立性をもたらしたが、これはまさに「不外治・不内御」の理念の徹底化であるとも見て取れる。それは言うなれば、前漢では方面軍司令官指揮下の全軍が一まとまりで「敵國」とされたのに対し、方面軍司令官の直属の部曲や、各軍事長官指揮下の部曲それぞれを別個の「敵國」として並立させることにより実現されたものであった。このように「敵國」を分散させて小規模化することにより、儒教理念に則りつつも、かつ「不臣」たる将帥の権力を抑えることを両立させたのである。つまり、儒教的・文化的背景としては、後漢ではなお『司馬法』に象徴される伝統的な軍隊観が根付いていたが、後漢王朝はそれを利用する形で、軍を朝廷の統御下に置くことを志向したのである。ただその一方で、後漢王朝は、自らが尊重する儒教理念が如上の「敵國」「不臣」の考えを支持していたために、軍を皇帝から独立したものと見なす伝統を棄却することができなかったのだという点は、後世とは異なる時代の特徴として注目に値しよう。

おわりに

本稿では、後漢において軍隊や将帥が如何なる存在として位置づけられていたのかということについて、後漢の人々の礼意識に着目して検討した。その結果、後漢では国と軍それぞれの領分を明確に峻別し、軍を「敵國」、将を「不臣」と見なして君主権力の及ばない存在とする礼意識が普及し、儀制や実際の軍事運用にもそれが反映されていたことを明らかにした。本稿では主に礼意識に焦点を当てたが、このような考えは実際の法制とも相性が良かった。

後漢の軍事長官は、軍中では国家の制定法である「軍法」を専らにし、その違反者や、自らが定めた「軍令」の違反者に対して擅に専殺権を含む処罰権を行使できた。⁽⁵⁶⁾ 後漢の軍事長官は、そのように直属の軍中に対する賞罰権を自由に行使し、生殺与奪を一手に握っていたというだけでなく、属下の将吏をすべて自ら選用できる権限を持ち、人事においても「不内御」が貫徹されていた。⁽⁵⁷⁾ しかし、この軍事体制は、続く魏晋期には大きく変容する。魏晋では軍事長官麾下の将帥の選任は中央官の手に握られ、⁽⁵⁸⁾ その他にも朝廷が軍隊を統御しようとする姿勢や実態、すなわち「内御」が強かったことは周知の通りである。そこからは、後漢から魏晋の間に、軍に関する認識が大きく変化したということが窺える。

そもそも後漢で如上の礼意識が普及した背景には、「軍禮」が『司馬法』に基づくものとされたこと、そしてそれが『春秋公羊伝』の「春秋の義」と結びつけられたことが大きな要因としてあった。そして、その両者の影響を受けた『白虎通』では、軍は「敵國」であるとされていたが、その後に興隆した左氏学では「王者は至尊にして敵體

の義無し⁽⁵⁹⁾」とされ、その立場からすれば、軍を「敵國」とする考えは容認されるものではない。実際に、『白虎通』では前掲の通り「春秋の義、兵は使と稱せざるは、臣とすべからざるを明らかにするなり。」とあり、軍隊は「使」とは称せず、それにより「不可臣」たることを示したというが、魏晉の都督は「使」とされ、皇帝の臣下たることが明確にされている。⁽⁶⁰⁾そして、一方の『司馬法』についても、魏晉南北朝の間にその大半が散佚し、「敢えて之を傳うる者無し」というような状態になった。⁽⁶¹⁾それに加え、その思想の中核となる「不外治・不内御」の文言は、魏晉南北朝のことを記す正史の中ではほとんど見られなくなる。

また、後漢軍制から魏晉軍制への移行の過程では、後漢後期の靈帝や、後漢末の曹操による中央集権的な軍制改革が行われており、現実面の如何なる必要性から魏晉軍制が形成されたのかも考慮する必要がある。これらについては、今後の課題としたい。

註

- (1) John King Fairbank (1974), "Introduction: Varieties of the Chinese Military Experience", Frank A. Kiernan, Jr. & John King Fairbank (eds.), *Chinese Ways in Warfare*, Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press.
- (2) 大庭脩『秦漢法制史の研究』（創文社、一九八二年）の第四篇・第一章「前漢の將軍」（初出は一九六八年）、宮宅潔「漢代諸職考——理念・制度・現実——」（『東洋史研究』五五・一、一九九六年）を参照。
- (3) 拙稿「後漢の軍事司法——「將軍」とその周辺」（『集刊東洋学』一二四、二〇二二年）。
- (4) 『史記』卷六十五・孫子伝に「將在軍、君命有所不受。」とある。
- (5) 長谷川隆一「国は賢を以て興る——『潜夫論』における

現状批判と賢人觀から唯才主義へ——」(早稲田大学大学院文学研究科紀要)六三、二〇一八年)を参照。

(6) 「夫國不可從外治、兵不可從中御。」

(7) 「大夫以君命出、進退在大夫也。」

(8) 「禮、兵不從中御。」

(9) これ以外にも、『三國志』卷十八・李典伝には、學問を好み、長者と称された後漢末の李典の發言中に、この文言が見られる。

(10) 「於是、拜(馮)緄爲車騎將軍、將兵十餘萬討之。詔策緄曰、蠻夷猾夏、久不討攝、各焚都城、蹈籍官人。……今非將軍、誰與修復前迹。進赴之宜、權時之策、將軍一之。出郊之事、不復內御。……。」

(11) 「時張奐上言、東羌雖破、餘種難盡。(段)熲性輕果、慮負敗難常。宜且以恩降。可無後悔。詔書下。熲復上言、臣本知東羌雖衆、而軟弱易制。所以比陳愚慮、思爲永寧之筭。而中郎將張奐說虜強難破、宜用招降。……臣每奉詔書、軍不內御。願卒斯言、一以任臣。臣臨時量宜、不失權便。……於是東羌悉平。」

(12) 范曄『後漢書』列伝五十五・張奐伝。

(13) 本稿では、『白虎通』の本文については、陳立『白虎通疏證』(吳則虞点校本、中華書局、一九九四年)を参照し

た。

(14) 「大夫將兵出不從中御者、欲盛其威、使士卒一意繫心也。故但聞將軍令、不聞君命、明進退在大夫也。春秋傳曰、此受命於君如伐齊、則還、何。大其不伐喪也。大夫以君命出、進退在大夫也。」

(15) 范曄『後漢書』紀三・孝章帝紀・建初四年十一月の条。

(16) 日原利国『漢代思想の研究』(研文出版、一九八六年)所収の「『白虎通』研究緒論——とくに礼制を中心として——」(初出は一九六二年)も参照。

(17) 「王者有暫不臣者五、謂祭尸、授受之師、將帥用兵、三老、五更。……不臣將帥用兵者、重士衆爲敵國、國不可從外治、兵不可從內御、欲成其威一其令。春秋之義、兵不稱使、明不可臣也。」

(18) ただ、そのような地位は軍中においてのみに限定され、任務が終わって帰還し、軍が解散されれば、彼らはまた臣下に戻る。あくまで「暫く」の措置であつたのである。

(19) 白虎觀會議および『白虎通』のその後の時代に対する影響については、池田秀三『白虎通義』と後漢の學術」(『中国古代礼制研究』京都大学人文科学研究所、一九九五年所収)を参照。

(20) 相見儀制については、拙稿「後漢の相見儀制——公儀

における「敬」を中心に」(『集刊東洋学』一二一、二〇一九年)を参照。

(21) 『北堂書鈔』卷六十四・設官部十六・車騎將軍一〇五の注に引く張璠『漢記』にも同様の記事が見られる。

(22) 「張溫以司空加車騎將軍、征韓遂。丙辰、引溫見於崇德殿、溫以軍禮長揖不拜。」

(23) 前掲註(20) 拙稿「後漢の相見儀制——公儀における「敬」を中心に」を参照。

(24) 「後拜將軍長史、將北軍五校士・羽林禁兵三千人、屯西河美稷、衛護南單于。聽置司馬・從事、牧守謁敬、同之將軍。(馬嚴は)後に將軍長史に拜せられ、北軍五校の士・羽林の禁兵三千人を將い、西河の美稷に屯し、南單于を衛護す。司馬・從事を置くことを聽し、牧守の謁敬すること、之を將軍に同じくす。」なお、馬嚴は特に明帝の恩寵を受けていたため、刺史や太守が將軍長史の馬嚴に謁見する際の「敬」礼を將軍と同様にするというこの措置は、馬嚴に限った例外的なものであった可能性も考えられる。ただ、少なくとも刺史や太守が將軍に対して「敬」礼を行うものとされていたことは間違いないだろう。

(25) たとえば、渡辺信一郎「後漢における古典的国制の成立——漢家故事と漢礼」(『日本秦漢史研究』一六、二〇一

五年)を参照。

(26) 高木智見「春秋時代の軍礼について」(『名古屋大学東洋史研究報告』一一、一九八六年)を参照。なお、この「五礼」の考え方は、魏晉南北朝時代を通じて国家儀礼の枠組みとして制度化される。その過程で、六世紀のとりわけ北齊において、由来を異にする複数の儀礼が集約され、唐代の五礼制度に連なる「軍礼」の枠組みが形成されることとなる。これについては、丸橋充拓「魏晉南北朝隋唐時代における「軍礼」確立過程の概観」(『社会文化論集』七、二〇一一年)を参照。

(27) 大庭脩『漢簡研究』(同朋舎出版、一九九二年)の第二篇・第一章「臨沂竹簡兵書と兵家」一五七頁(初出は一九七七年)。大庭氏は、前漢・武帝期以降に詔勅や上奏文などの中に『司馬法』の引用が増えたこと、かつ後述のように、『司馬法』が「軍禮」の字を冠して『漢書』藝文志の「六芸略」の「禮」類に組み込まれたということ、そして『孫子』や『孫臏兵法』『六韜』『尉繚子』などの主要な兵書の内容が含まれている、武帝期前漢墓出土の臨沂漢簡(銀雀山漢簡)の中に『司馬法』が見られないことなどから、そのように述べた。

(28) 湯浅邦弘『中国古代軍事思想史の研究』(研文出版、一

九九九年)の第二部・第一章「呉子」を参照。

(29) 前掲註(27) 大庭脩「臨沂竹簡兵書と兵家」。

(30) 耿秉は范曄『後漢書』列伝九・耿弇伝附耿秉伝を、馮緄は同書列伝二十八・馮緄伝を、段熲は『北堂書鈔』卷六十三・設官部十五・中郎將九十四に引く『東觀漢記』を参照。曹操についても、『孫子』の魏武注や、『三国志』卷一・武帝紀の朝廷掌握後の曹操の教令等に『司馬法』がしばしば引かれている。

(31) 『隸釈』卷七「車騎將軍馮緄碑」に「習父業、治春秋嚴・韓詩倉氏、兼律大杜。」とあり、范曄『後漢書』列伝二十八・馮緄伝に「少學春秋司馬兵法。」とある。

(32) 范曄『後漢書』列伝六十・孔融伝に載せる、曹操が孔融(字は文舉)に送った書簡の中に、郝慮(字は鴻豫)について「昔國家東遷、文學盛歎鴻豫名實相副、綜達經學出於鄭玄、又明司馬法。(昔、國家の東遷するや、文學は盛んに鴻豫の名實相副い、經學に綜達すること鄭玄より出で、又た司馬法に明るきことを歎ず。）」とある。

(33) 范曄『後漢書』列伝五十二・荀淑伝附荀悅伝。なお、本稿では、『申鑒』の本文に関しては、孫啓治『申鑒注校補』(中華書局、二〇一二年)を参照した。

(34) 「孝武皇帝以四夷未賓、寇賊姦先、初置武功賞官、以寵

戰士。若今依此科而崇其制、置尙武之官、以司馬兵法選位、秩比博士、講司馬之典、簡蒐狩之事、掌軍功爵賞、小統於五校、大統於太尉、既周時務、禮亦宜之。」

(35) 日原利国前掲註(16) 書所収「荀悅の規範意識について」(初出は一九五九年)でも、この記事に関して、『司馬法』との関係については言及していないものの、「ここに彼の根深い礼典意識が窺われる。」と述べている。

(36) 『漢書』卷三十・藝文志・兵書略の後序に「下及湯武受命、以師克亂而濟百姓、動之以仁義、行之以禮讓。司馬法是其遺事也。」とあり、『史記』卷六十四・司馬穰苴伝に「太史公曰、余讀司馬兵法、閔廓深遠、雖三代征伐、未能竟其義。……」とある。

(37) 「天子先驅至、不得入。先驅曰、天子且至。軍門都尉曰、將軍令曰、軍中聞將軍令、不聞天子之詔。居無何上至、又不得入。於是上乃使使持節詔將軍、吾欲入勞軍。亞夫乃傳言開壁門。壁門士吏謂從屬車騎曰、將軍約、軍中不得驅馳。於是天子乃按轡徐行。至營、將軍亞夫持兵揖曰、介冑之士不拜。請以軍禮見。……成禮而去、既出軍門。群臣皆驚。文帝曰、嗟乎、此眞將軍矣。……」

(38) 「禮、介者不拜。」

(39) 註(42)の引用文を参照。なお、本稿では、『司馬法』

の本文は、王震『司馬法集釈』（中華書局、二〇一八年）を参照した。

(40) 「祭彤武節剛方、動用安重。雖條侯・穰苴之倫、不能過也。」

(41) 「條侯、周亞夫也。爲將軍、軍於細柳。文帝幸其營、亞夫持兵揖曰、介冑之士不拜、請以軍禮見。文帝曰、此真將軍也。」

(42) 「古者、國容不入軍、軍容不入國。軍容入國則民德廢、國容入軍則民德弱。故在國言文而語溫、在朝恭以遜。修己以待人、不召不至、不問不言、難進易退。在軍抗而立、在行遂而果。介者不拜、兵車不式、城上不趨、危事不齒。」

(43) 以上、『司馬法』の思想の特質については、湯淺邦弘前掲註(28)書の第二部・第七章「司馬法」(初出は一九九〇年)を参照。

(44) 「司馬法云、闔外之事、將軍裁之。故云、禮。」

(45) 『漢書』芸文志によれば『司馬法』は百五十五篇あったが、その大半が魏晉南北朝時代に散佚し、唐初に残ったのはわずか三卷分で、現行の『司馬法』に至っては同じく三卷ではあるものの、さらに内容が減って五篇分しか伝わっていない。つまり、「不外治・不内御」の文言も、唐代までに散佚した『司馬法』の諸篇の中に含まれていた可能性も

考えられるのである。なお、現行『司馬法』は後世の偽書であるとする考えが古くからあるが、田旭東氏や湯淺邦弘氏の述べるように、現行『司馬法』は概ね当時の『司馬法』の一部であり、少なくとも国容・軍容の思想を含むその中核部分は戦国時代中期頃に形成されたと見て良いものと思われる。これについては、田旭東『司馬法浅説』（解放軍出版社、一九八九年）の「一、『司馬法』書考」および、前掲註(43)湯淺邦弘「司馬法」を参照。

(46) 「臣聞、上古王者之遣將也、跪而推轂曰、闔以內者、寡人制之。闔以外者、將軍制之。軍功爵賞皆決於外、歸而奏之。此非虛言也。臣大父言、李牧爲趙將居邊、軍市之租皆自用饗士、賞賜決於外、不從中御也。」なお、末尾の「不從中御也」の箇所は、版本により三種のヴァリエーションがあるが、本稿では『通典』卷一四八・兵典一・論將の条、『孫子』謀攻篇の何氏注、そして『太平御覽』卷二七八・兵部九・辺將の条に引く『史記』に「不從中御也」とあるのに従った。

(47) ただ、『芸文類聚』卷五十九・武部・戦伐の条などに引く西晋の摯虞『新礼議』では、「跪而推轂」は「古の兵書」の記述だとする。

(48) 『漢書』卷三十・芸文志・兵書略の後序。

(49) 『礼記』学記篇の「當其爲尸、則弗臣也。」の句に對する孔穎達の疏に引く『鉤命決』に「暫所不臣者五、謂師也、三老也、五更也、祭尸也、大將軍也。」とある。

(50) 以上、讖緯書と兩漢交替期の公羊学者との關係については、日原利国前掲註(16)書所収「災異と讖緯」(初出は一九七二年)、安居香山『緯書の成立とその展開』(国書刊行会、一九七九年)の第六章「春秋緯より見た緯書成立の考察」、陳蘇鎮『春秋』与漢道——漢政治与政治文化研究』(中華書局、二〇一一年)の第五章・第二節「讖緯之学的形成及其對《公羊》学的發展」、第三節「讖緯和《公羊》学對東漢内外政策的影響」、藤田衛「緯書の成立時期について」(『東洋古典学研究』三九、二〇一五年)などを参照。

(51) 何休と『司馬法』の關係は、黄朴民「儒家的軍事文化伝統与何休的戰爭觀念」(『軍事歴史研究』一九九九年第二期)を参照。

(52) 前掲註(51)黄朴民論文では、『司馬法』を利用した何休の態度は、「當時の主導的な軍事文化の思潮」から距離を置くものだと見なすが、実際には『司馬法』や公羊説に依拠したそのような態度こそが、むしろ後漢初期以降の「主導的な軍事文化の思潮」であつたのである。

(53) 前掲註(16)日原利国「『白虎通』研究緒論——とくに

礼制を中心として——」、齋木哲郎『後漢の儒学と『春秋』』(汲古書院、二〇一八年)の第四章「『白虎通義』と後漢の儒学」などを参照。

(54) 渡邊将智『後漢政治制度の研究』(早稲田大学出版部、二〇一四年)の終章を参照。

(55) 前掲註(3)拙稿「後漢の軍事司法——「將軍」とその周辺」を参照。

(56) 前掲註(3)拙稿「後漢の軍事司法——「將軍」とその周辺」を参照。

(57) 前掲註(2)大庭脩「前漢の將軍」によれば、前漢の將軍は屬下の將吏について、通常の勅任官は奏請の上で任命でき、それより下位はただちにその意志により任命できた。すなわち、百石以下の將吏に対しては選定権と任命権の両者を將軍が握り、それより上位の將吏に対しては正式な任命権は朝廷に属するものの、選定権はやはり將軍にあり、よつて將軍は屬下のすべての人事において選定権を持っていたのである。大庭氏は後漢の將軍については触れていないが、後漢でも同様であつた。各々一例ずつ挙げれば、范曄『後漢書』列伝七上・文苑列伝・傅毅伝には、章帝期の車騎將軍の馬防が、一般の部曲内では最高位の指揮官たる軍司馬(比千石)を奏請し、また和帝期の車騎將軍の

寶憲が主記室および主簿（比三百石）などの幕府官を奏請している例が見え、同書の列伝五十四・趙岐伝では、霊帝期の車騎將軍の張温が幕府内の最高位である長史（千石）を奏請しており、同書の列伝七十一・文苑列伝上・杜篤伝では先述の車騎將軍の馬防が幕府内では第三位の高官である從事中郎（六百石）を奏請している。部曲や幕府の高官であっても、將軍の奏請により任命を受けていることが分かる。將軍以外の軍事長官も同様であり、范曄『後漢書』

列伝九・耿弇伝附耿恭伝では、明帝期の騎都尉の劉張が司馬を奏請し、『太平御覽』卷四七七・人事部一一八・施恩下に引く『董卓別伝』では、桓帝期の当時、護匈奴中郎將であつた張奐が軍司馬を奏請しているという例が見える。なお、朝廷により奏請による任命が拒まれたという事例は、後漢末の混乱期における献帝東遷の際、朝廷が軍閥の専横下にあつた状況での例外的な一例を除き、他には見られない。

(58) 越智重明「領軍將軍と護軍將軍」、『東洋學報』四四・

一、一九六一年）、陶新華「関于魏晋南朝中護軍、中領軍主武官選的幾箇問題」、『安徽史學』二〇〇三年第三期）などを参照。

(59) 『春秋左氏伝』桓公八年の「祭公來、遂逆王后於紀。」の經文に対する孔穎達の疏に引く許慎『五經異義』に、「左氏說、王者至尊、無敵體之義、不親迎。」（左氏說、王者は至尊にして、敵體の義無ければ、親迎せずとす。）とある。

(60) 『三國志』卷十四・蔣濟伝など。また、廖伯源「使者与官制演變——秦漢皇帝使者考論」（天津出版社、二〇〇六年）の卷十の「五、監督州郡軍事之使命演變為『都督諸軍事』等新官職」なども参照。

(61) 『隋書』卷三十二・經籍志一・礼類後序に「漢初……又得司馬穰苴兵法一百五十五篇及明堂陰陽之記、竝無敢傳之者。」とある。なお、このことについては註(45)も参照。

（東北大学大学院文学研究科博士後期課程）

TOYO GAKUHO

THE JOURNAL OF THE RESEARCH DEPARTMENT OF
TOYO BUNKO

Vol. 103, No. 4

March 2022

Military Concepts and Commanders during the Later Han Period:
The Relationships between *The Methods of Sima, Baihu Tong*, and
“Military Ritual”

AOKI Ryuichi

It has frequently been characterized of imperial dynastic China that its main military objective was to maintain the institutions of the state and the social order based on the emperor and the bureaucracy that served him. This means that the military had to be a part of the bureaucracy to achieve that objective. That being said, this bureaucratization of the military did not entirely coincide with the establishment of imperial dynastic governance. It is therefore appropriate to ask when and how bureaucratization was actually achieved.

This article focuses on the military under the Later Han Dynasty, in order to clarify aspects of its bureaucratic character. In particular, the author addresses the following point focusing on the notion of decorum: that is, whether it was regarded as proper for the military to be controlled by the emperor and the imperial court.

The author begins with a review of the principle that “State affairs should not be interfered in by the military, and military affairs should not be interfered in by the state” and how it was perceived during the Later Han Pe-

riod. The author then addresses the discussions in the White Tiger Hall held during the reign of Emperor Zhang, which were decisive for spreading the notion of decorum, and analyzes perceptions held regarding the military at the time based on *Baihu Tong*, which summarizes the results of those discussions. As described there, the philosophy of *The Methods of Sima* relates to “the principles in the *Spring and Autumn Annals*” and ideas in the weft texts. On the other hand, “military ritual” of the Han Dynasty had followed *The Methods of Sima* since the second half of the Former Han Period.

The author concludes that Han perceptions from *The Methods of Sima* connected with “military ritual” and “the ritual regulations for meeting each other” determined the notion of decorum, which was developed during the Former Han period, and was then adopted by the Later Han Dynasty, leading to the bureaucratization of the military.

Ming Dynasty Maritime Trade during the Early Reign of Emperor Hongwu before the Unification of the Tribute Trade and Maritime Restrictions

NAKAJIMA Gakusho

This article discusses the development of maritime trade during the early reign of Emperor Hongwu 洪武, spanning the firm establishment of the Ming Empire in 1368 and the abolition of the Maritime Trade Supervisorates (*shibosi* 市舶司) in 1374, by examining the Chinese, Korean and Japanese primary sources. Emperor Hongwu repeatedly issued maritime restriction edicts and strictly prohibited private maritime voyages shortly after his enthronement, probably in response to the revolts of maritime bandits of Lanxiushan 蘭秀山 in the Zhoushan Islands. In late 1371, Hongwu again issued a maritime restriction edict to protect the imperial fleet carrying provisions for the military campaign in Liaodong 遼東. Thereafter, he ordered strict maritime restrictions along the Zhejiang 浙江 coast, not allowing even fishing